

論文

支謙訳『義足経』解説研究(一)

京都光華女子大学教授

加 治 洋 一

本稿は、支謙訳『義足経』に試訳を施そうとするものである。『義足経』という經典自体については、あるいは『スッタニパータ』第四章 (*Suttanipata ahakavagga*) やその注釈書『パラマッタジョーティカー』 (*Paramatta-jatika*) との関係は、村上真完『仏のことば註』<sup>(三)</sup>に詳しいので当該書物を参照された<sup>(一)</sup>。

さて、呉の支謙は、在家の仏教信者であるが、諸言語に通じ、中国語が堪能であったのみならず中国文化にも造詣が深かった。<sup>(二)</sup> 支謙はそのような素養を漢訳する際

に存分に發揮し、原典を直訳するよりも意識することを好んだ。韻文を訳す際にも、平仄を調えるのは無理であるにせよ、中国語詩文としてのリズム(節奏)を調べ、時には脚韻を工夫するなど、漢文としての水準を可能な限り高める努力を惜しまなかった。

支謙の漢訳には、確かに読みにくい側面がないわけではない。しかし、その読みにくさの主たる原因は、後に成立していく定訳語とは異なる訳語を使ったり、固有名詞を意識したりすることなどから生じるものである。寧

(一) 村上真完『仏のことば註』(三)『パラマッタジョーティカー』(春秋社1988) pp.550 ff. の註1。極めて優れた解題が当該箇所  
に存在する。参照されたい。

(二) 『高僧伝』には、「博覽經籍莫不精究。世間伎藝多所綜習。遍學異書通六國語」(『大正』50, p.325a) とある。

る漢文としては他の翻訳漢文の追隨を許さない、格調の高い文章であるとも言えるものなのである。

では、パリーリの平行経に無理に寄り添わせることなく、出来るだけ漢文を漢文として読むことに主眼を置いて訓読を試みることにしよう。今回訳を試みるのは、全十六経中、第一経から第三経までである。

### 凡例

一、底本には『大正新修大藏經』第四卷所収の「佛説義足經」を用いる。ただし、返り点は省略し、パルクチュエーションは部分的に改変した。

二、漢文の書き下しについて。

・できるだけ原文そのままを書き下すが、古典漢文(取り分け支謙の訳文)は、原文のままでは文意をとりづらいことが屢しばある。誤解を招きかねないような箇所には本文にない字句を「」で補った。また、会話文には「」を附した。

・なお、地名や人名など、音写された個有名詞の原語を示すことは、却って煩瑣になるので略した。

・原則、伝統的な漢文訓読のルールに従うが、時に異なった訓みを採用する。その場合は註に根拠を示す。

(174b) 佛説義足經卷上 八雙十六輩

<sup>(3)</sup>  
<sup>(4)</sup>  
桀貪王經第一

吳月支優婆塞支謙譯

聞如是。佛在舍衛國祇樹給孤獨園。時有一梵志。祇樹間有大稻田已熟。在朝暮當收穫梵志晨起。往到田上遙見禾穠。心內歡喜自謂得願。視禾不能捨去。佛是時從諸比丘。入城求食。遙見梵志喜樂如是。便謂諸比丘。汝曹見是梵志不。皆對言見。佛默然入城。食後各還精舍。即日夜天雨大雹。皆殺田中禾。梵志有一女。亦以夜死。梵志以是故愁憤憂煩。啼哭無能止者。明日衆比丘持應器入城求食。便聞梵志有是災害。啼哭甚悲。非沙門梵志及國人所能解其憂者。比丘食竟。還到佛所。作禮白。梵志意狀如是。言適竟。梵志啼哭。來到佛所。勞佛竟。便坐佛邊。

佛説義足經卷上 八雙十六輩

呉月支の優婆塞支謙 譯す

桀貪王經第一

聞ましきしことはくまの如し。佛、舍衛國 祇樹給孤獨園に在ましき。

時に一梵志(5)有り。祇樹の間に大稻田有りて、已に熟せり。朝暮(5)に在りて當に收穫すべし。梵志 晨あしたに起き、往きて田上に到り、遙かに禾(6)穰を見、心内に歡喜して自ら

謂おもふらく、「願ふを得たり」と。禾を視て捨て去ること能はず。

佛、是の時、諸比丘を従へ、城に入りて食を求めたまふに、遙かに梵志の喜樂することはく(7)の如くなるを見し、便ち諸比丘に謂のたまふ。「汝曹(7)(なんだち)、是の梵志を見しや不いなや」と。皆對こたへて言まかさく、「見たり」と。佛、默然として城に入りたまふ。食して後、各おの精舎(8)に還る。即日(8)の夜に、天、大雹を雨ふらし、皆、田中の禾を殺(9)ふ。梵志(10)に一女有りしも、亦た夜を以て死す。梵志、是の故を以て(11)、愁憤憂煩して啼哭するに、能く止とどむる者無

- (3) Cf. Sn 4-1 Kama, Pj 4-1. 村上前掲書 pp.344 ff. 中村元『ブツダのこぼ スッタニパータ』(岩波文庫 1984) pp.174 ff.
- (4) 宋・元・明の三本は「王經」の二文字を欠く。
- (5) この「在」は「於」と同じ、locativeを示す助辞。
- (6) 禾穰 稲の穂
- (7) 「汝曹」の「曹」は複数の語尾。
- (8) 即日 その日。当日。
- (9) この「以」も、前頁註3と同様、locativeを示す助辞。漢文訓読にナ行変格活用は用いない。即ち、「死ぬ」とは訓まない。
- (10) 「以是故」 この文型を「是れを以ての故に」と訓む、所謂の訓み癖があるが、日本語としていかにも不自然であるので採らない。「以ての故」は「以ての外」等からの類推から生じた慣用訓みであろうが、そもそも「以ての外」自体、「以外」の字訓から生じた読みであるとの説が有力である。漢文の文型としては「以……故……故」と理由を列挙するものもあり、その場合も「……の故と……の故とを以て」と訓む方が理に適っている。

し。

明日、衆比丘、應器<sup>(12)</sup>を持ちて城に入り、食を求むるに、便ち、梵志に是の災害有りて、啼哭し甚だ悲しめるを聞く。沙門・梵志、及び國人にして能く其の憂を解く所の者あらず。比丘 食し竟り、還りて佛の所に到り、禮を作して白さく。「梵志の意状、是くの如し」と。言、適しく竟るに、梵志 啼哭して來り、佛の所に到る。佛を勞ひ竟り、便ち佛の邊りに坐しき。

佛知其本憂所念。即謂梵志言。世有五事。不可得避。亦無脫者。何等爲五。當耗減法。欲使不耗減。是不可得。當亡棄法。欲使不亡棄。是不可得。當病瘦法。欲使不病瘦。是不可得。(174) 當老朽法。欲使不老朽。是不可得。當死去法。欲使不死去。是不可得。凡人無道無慧計。見耗減亡棄老病死法來。即生憂憤悲哀。拍髀熱自耗身無益。何以故。坐不聞知諦。當如是。梵志我聞有抱諦者。見耗減法亡棄老病死法來。不以爲憂。何以故。已聞知諦。當如是。不是獨我家耗。(14) 世悉亦爾。世與耗俱生。我何從獨得離。慧意諦計。我今已耗。至使憂之。坐贏不

食。面目委色<sup>(15)</sup>。與我怨者快喜。與我厚者代憂。慘感家事不修計耗。不可復得。已諦如是。見耗減亡棄老病死法來。終不復憂也。

佛、其の本憂所念を知し、即ち梵志に謂ひて言はく、「世に五事有り。避くるを得可からず、亦た脱する者無し。何等をか五と爲す。「一は」當に耗減すべき法なり。耗減せざらしめんと欲すとも、是れ得可からず。「二は」當に亡棄すべき法なり。亡棄せざらしめんと欲すとも、是れ得可からず。「三は」當に病瘦すべき法なり。病瘦せざらしめんと欲すとも、是れ得可からず。「四は」當に老朽すべき法なり。老朽せざらしめんと欲すとも、是れ得可からず。「五は」當に死去すべき法なり。死去せざらしめんと欲すとも、是れ得可からざるなり。凡そ人にして、道無く、慧計無くんば、耗減・亡棄・老病死法の來るを見て、即ち憂憤悲哀を生じて髀を拍息を熱くして身を耗すとも、益無し。何の以故に。坐して、知諦の當に是くの如くなるを聞かざればなり」と。

梵志「言く」、「我れ、諦を抱く者有りて、耗減する法

・亡棄し老病死する法の来るを見れども、以て憂と爲さざるを聞けり。何の以故に。已に、知諦の當に是くの如かるべきを聞けばなり。是れ獨り我が家のみ耗するにあらず。世も悉く亦た爾り。世は耗と俱に生ず。我れ何にか従ひて獨り離るるを得んや。慧意・諦計、我れ今已に耗せば、之を憂へしむるに至れり。坐して羸せ食せず、面目委色たり。我が與に怨む者は快喜し、我が與に厚きは代りて憂ふ。惨感して家事は修せず、計は耗じて復た得可からず。已に諦かなることは是くの如し。耗減・亡棄・老病死の法の来るを見るも、終に復た憂へざるなり」と。

佛以是因縁。爲梵志說偈。

不以憂愁悲聲 多少得前所亡  
 痛憂亦無所益 怨家意快生喜  
 至誠有慧諦者 不憂老病死亡  
 欲快者反生惱 見其華色悅好  
 飛響不及無常 珍寶求解不死  
 知去不復憂追 念行致勝世寶  
 諦知是不可追 世人我卿亦然  
 遠憂愁念正行 是世憂當何益

佛、是の因縁を以て、梵志の爲に偈を説きたまふ。

憂愁悲の聲を以てしては 多少も前に亡ぜし所を

- (12) 應器 托鉢用の鉢のこと。
- (13) 漢文訓読ではカ行変格活用は用いない。即ち、「来る」とは訓まない。
- (14) 宋・元・明の三本には「是不」とある。
- (15) 宋・元・明の三本には「痿」とある。同義。
- (16) 「べし」と訓む漢字は様ざまあるが、強弱やニュアンスの差はさておき、概ね当為の意味であることが多い。「可」も「べし」と訓むが、「可」には当為の意味は稀薄で、基本的に可能の意味である(「可からず」は「できない」の意)。現代語訳を添えないことでもあるので、解釈を間違えないよう、この書き下しでは「可」は漢字表記する。
- (17) 『大正』は「自」とするが、訓読は、宋・元・明の三本に基づき「息」を採っている。『大正』に従えば、「自らを熱くし」となる。
- (18) 宋・元・明の三本には「退」とある。こちらを採ると「退かず」となる。

得ず

痛憂するにも亦た益する所無く 怨家は意に快び

喜を生ず

至誠にして慧諦有る者は 老病死亡を憂へず

快を欲する者は反つて惱を生じ 其の華を見なば

色 悦好なり

飛響も無常に及ばず 珍寶は不死を解せんと求む

去るを知らば復た憂へ追はず 行を念ぜば世に勝

る寶に致る

諦知は是れ追ふ可からず 世人も我も脚も亦た然

り

憂愁を遠ざけ正行を念ぜよ 是の世の憂ひ當に

何をか益すべけんや

佛復爲梵志極説經法。次説布施持戒現天徑。欲善其惡無

堅固。佛知梵志意軟向正(21)便見四諦。梵志意解。便得第一

溝港道。如染淨繪受色即好。便起頭面著佛足叉手言。我

今見諦。如引鏡自照。從今已後身歸佛歸比丘僧。受我爲

清信士。奉行五戒。盡形壽淨潔不犯戒。便起繞佛三匝而

去。衆比丘便白佛言。快哉。解洗梵志意。(15c) 乃如  
是至(22)便喜笑而去。

佛、復た梵志の爲に極めて經法を説き、次で布施・持

戒を説き、天徑を現したまふ。(23)「梵志」善を欲し、其の

惡に堅固なる無し。佛、梵志が意の軟(24)ぎ、正に向ふを

し、便ち四諦を見したまふ。梵志、意に解して便ち第一

溝港道を得ること、染(25)れたる淨繪も色を受けなば即ち好

きが如し。便ち起(26)ちて頭面も佛の足に著け、又手して

言く、「我れ今諦を見ること、鏡を引きて自らを照らす

が如し。今より已後、身佛に歸し、法(26)に歸し、比丘僧

に歸せん。我れを受けて清信士と爲したまへ。五戒を奉

行し、形壽を盡すまで淨潔にして戒を犯さじ」と。便ち

起ちて佛を繞ること三匝にして去る。

衆比丘、便ち佛に白して言さく、「快き哉。梵志の意

を解洗したまふこと乃ち是くの如し。至りて便ち喜笑し

て去れり」と。

佛語諸比丘。不但是返解是梵志憂。過去久遠。是閻浮利

地有五王。其一王名曰桀貪。治國不正。大臣人民悉患王所爲。便共集議言。我曹家家出兵。皆拔白到王前。共謂王。寧自知所爲不正施行貪害萬姓不。急出國去。不者必相害傷。

佛、諸比丘に語りたまふ。「但だ是れ返つて是の梵志

の憂を解くのみならず。過去久遠に、是の閻浮利の地に五王有り。其の一の王を名づけて桀貪と曰ふ。國を治むるに正しからず。大臣人民、悉く王の爲す所を患へ、便

ち共に集ひ議して言く、「我曹、家家より兵を出さん」と。皆、白「刃」を抜きて王の前に到り、共に王に謂く、「寧ろ自ら爲す所の不正にして、施行の萬姓を貪害せるを知るや不や。急ぎ國を出で去れ。せずんば、必ず相ひ害傷せん」と。

王聞大恐怖戰慄。衣毛悉墜。以車騎而出國去。窮厄織草。賣以自給。大臣人民。取王弟拜作王。便正治不枉萬姓。故王桀貪聞弟興將爲王。即内歡喜計言。我可從弟有

(19) 飛響 震響、つまり雷のこと。

(20) この「行」は有為法のこと。つまり無常なるものごと。漢訳中に現れる「行」の字は注意が肝要。様ざまな意味を担う。

(21) 宋・元・明の三本には「使」とある。「使」を採ると、「四諦を見せしむ」と訓む。

(22) 宋・元・明の三本には「使」とある。「使」を採ると、「是くの如く至れるを喜笑して去らしむ」と訓む。

(23) 天徑を現したまふ。「天徑」は天に到る道、つまり所謂の生天論を説いたということ。ブツダは在家のものに対して、先ずは施論・戒論・生天論の三論を説いたとされる。

(24) 第一溝港道 四向四果の第一、預流のこと。

(25) 繪 絹織物。

(26) 「大正」には欠落するが、「積砂蔵」に従つて「歸法」を補う。

(27) 諸版「白」とするが、明版には「自」とある。こちらを採ると「皆、抜かに自ら王の前に到り」となる。

(28) 閻浮利 Jambudvīpa 閻浮提とも写音する。我われの住まう、この大陸。

(29) この「相」は「お互いに」の意味ではない。下接する語が動詞であり、動作が対象に及ぶことを表す接頭辞。

(30) 「大正」は「興」とするが、宋・元・明の三本には「興」とある。「興」の場合は、「將の興に」となる。文脈上はこちらの方が相応しいか。

所乞。可以自活。便上書具自陳說。便從王乞一隙。可以自給。王即與之。愍傷其厄。得一隙便正治。復乞兩隙。四五至十隙。二十三十四五至五百隙。二百至五百隙。便復乞半國。王即與之。便正治。如是久遠。桀貪生念。便興半國兵。攻弟國即勝。便自得故國。復生念。我今何不悉興一國兵攻二國三國四國。便往攻悉得勝。復正治四國。復生念。今我何不興四國兵攻第五國。便往攻即復得勝。是時陸地盡。四海內皆屬王。便改號自立爲大勝王。

王 聞きて大いに恐怖戰慄し、衣毛悉く豎つ。車騎を以て國を出で去る。厄に窮して草薺<sup>(31)</sup>を織り、賣りて以て自給せり。大臣人民、王の弟を取りて拜みて王と作すに、便ち正しく治めて萬姓を枉げず。故王桀貪、弟の將を興して王と爲るを聞き、即ち内に歡喜し、計して言く、「我れに弟より乞ふ所 有る可し。以て自活す可し」と。便ち上書して具に自ら陳說すらく、「便ち王より一隙<sup>(33)</sup>を乞ふ。以て自給す可し」と。王、即ち之を與へ、其の厄を愍傷す。一隙を得て便ち正しく治む。復た兩隙を乞ひ、四五より十隙に至る。二十、三十、四十、五十よ

り百隙に至る。二百より五百隙に至り、便ち復た半國を乞ふ。王、即ち之を與ふるに、便ち正しく治む。

是くの如く久遠にして、桀貪 念を生ずらく、「便ち半國の兵を興し、弟の國を攻めん」と。即ち勝ちて、便ち自ら故國を得たり。復た念を生ず。「我れ今何ぞ悉く一國の兵を興して二國、三國、四國を攻めざらんや」と。便ち往きて攻め、悉く勝つことを得たり。復た正しく四國を治む。復た念を生ずらく、「今我れ何ぞ四國の兵を興して第五國を攻めざらんや」と。便ち往きて攻め、即ち復た勝つことを得たり。是の時、陸地は盡き、四海の内は皆な王に屬せり。便ち號を改め自らを立てて大勝王と爲す。

天帝釋便試之。寧知厭足不。便化作小童梵志。姓駒夷。欲得見王。被髮拄金杖。持金瓶住宮門。守門者白王言。外有梵志姓駒夷欲見王。王言大善。便請前坐。相勞問畢。却謂王言。我屬從海邊來。見一大國豐樂。人民熾盛。多有珍寶。可往攻之。王審足復欲得是國。王言。我大欲得。天王謂言。可益裝船興兵相待。却後七日(175)

○ 當將王往適。言天王便化去。到其日便大興兵益裝船。不見梵志來。是時王愁憂不樂。拍髀如言。怨哉。我今以亡是大國。如得駒夷不堅獲。如期反不見。是時一國人民。迴坐向王。王啼亦啼。王憂亦憂。王處憂未嘗止聞識經偈。便生意而說言。

天帝釋、便ち之の寧ろ厭足を知るや不<sup>いな</sup>やを試んと、便ち小童梵志に化作す。姓は駒夷なり。王に見ゆるを得んと欲し、被<sup>35)</sup>髮にして、金杖を拄<sup>たさ</sup>げ、金瓶を持ちて宮門に住せり。守門の者、王に白して言さく、「外に梵志有り。姓は駒夷なり。王に見えんと欲す」と。王言く、「大いに善し」と。便ち請ひて坐に前<sup>ま</sup>み、相ひ勞問し畢り、却<sup>しりぞ</sup>

〔31〕 草薺「薺」は『康熙字典』には「蔬菜」とあるが、今は「織」の目的語なので、それでは意味が通じない。草蓆や蚊帳の類いか？ あるいは、「織」は「植」の音通か？ 後者だとすると、「蔬菜の類いを栽培した」の意となる。

〔32〕 故王「死んだ王」ではない。昔の王、つまり前王である築負のこと。

〔33〕 隙村。村落。

〔34〕 宋・元・明の三本には「柱」とある。今は同義。

〔35〕 被髮 髪を結ったり束ねたりせずに垂らしたさま。

〔36〕 審足 この「足」は「充分」の意を表す接尾辞。情報を充分に検討した、との意。

〔37〕 註(29)と同じ。「私を待ってください」ほどの意。

〔38〕 倒置の文型。目的語を動詞に先行させる際に「以」や「於」の字を使用する。ここでは「是大國」が「亡」の目的語であることを示す。

きて王に謂ひて言く、「我が屬<sup>いた</sup>れるは、海邊從り來るなり。一大國の豐樂なるを見たり。人民熾盛にして、多く珍寶有り。往きて之を攻む可し」と。王、審<sup>36)</sup>足して復た是の國を得んと欲す。王言く、「我れ大いに得んと欲す」と。天王謂ひて言く、「益ます船を裝し兵を興して相<sup>37)</sup>ひ待つ可し。却後七日に、當に王を將めて往適すべし」と。言ひ「おはり」て、天王、便ち化し去る。

其の日に到りて、便ち大いに兵を興し益ます船を裝すれども、梵志の來るを見ず。是の時、王、愁憂して樂まず。髀を拍ちて言ふが如し。「怨しき哉。我れ今、是の大國を以て亡<sup>ほろ</sup>せり。<sup>38)</sup>駒夷を得たるが如きも堅くは獲ざること、期して反つて見ざるが如し」と。

是の時、一國の人民、坐を迴りて王に向ふ。王、啼きて亦た啼き、王、憂へて亦た憂ふ。王、憂ひに處して未だ嘗て止まざるに、經偈を聞識し、便ち意を生じて説きて言く、

増念隨欲 已有復願

日盛爲喜 從得自在

念を増し欲に隨へば 已に有るも復た願ふ

日に盛んなるを喜びと爲さば 從つて自在を得ん

王便爲衆人説。欲偈意。有能解是偈義者。上金錢一千。時坐中有少年。名曰鬱多。鬱多即白王言。我能解是義相。假七日乃來對。到七日白母言。我今欲到王所解王憂。母謂子。子且勿行。帝王難事如燃火<sup>(39)</sup>。其教如利刀。難可親近。子言母。勿愁憂。我力自能淹王偈義<sup>(40)</sup>。當得重謝。可以極自娛樂。便到王所言。我今來對其義。即説偈言。

王、便ち衆人の爲に説かく、「偈の意を欲す。能く是

の偈の義を解く者有らば、金錢一千を上へん」と。時に坐中に少年有り。名を鬱多と曰ふ。鬱多、即ち王に白して言さく、「我れ能く是の義相を解す。七日を假りなば乃ち來りて對へん」と。

七日に到りて、母に白ひて言く、「我れ今、王所に到りて王の憂ひを解かんと欲す」と。母、子に謂く、「子。且く行くこと勿れ。帝王の難事は燃火の如し。其の教は利刀の如し。親近す可きこと難し」と。子、母に言く、「愁憂すること勿れ。我が力は自ら能く王を偈の義に淹し、當に重き謝を得べし。以て極めて自ら娛樂す可し」と。便ち王所に到りて言く、「我れ今來れり。其の義を對へん」と。即ち偈を説きて言く、

増念隨欲 已有復願

已放不制 如渴飲湯

悉以世地 滿馬金銀

悉得不厭 有黠正行

如角距生 日長取増

人生亦爾 不覺欲増

飢渴無盡 日日復有

金山拄天 状若須彌

悉得不厭<sup>(41)</sup> 有點正行

欲致痛冥 未嘗聞之

願聞遠欲 厭者以黠

厭欲爲尊 欲漏難離

黠人覺苦 不隨愛欲

如作車輪 能使致堅

稍稍去欲 意稍得安

欲得道定 悉捨所欲

如し

悉く世の地を以て<sup>(42)</sup> 馬・金・銀を満たし

悉く得て厭きざれども<sup>(43)</sup> 黠有らば正行す

角・距<sup>(44)</sup> 生ぜば 日に長ずるが如く 取増す

人生も亦た爾り 欲の増すを覺らず

飢渴 無盡にして 日に復た有り

金山有りて天を拄ぐ<sup>(45)</sup> 状 須彌の若し

悉く得て厭きざれども 黠有らば正行す

痛冥を致さんと欲するは 未だ嘗て之を聞かず

聞くを願ひ欲を遠ざけ<sup>(45)</sup> 厭ふ者は黠を以てし

欲を厭ふを尊しと爲す 欲漏は離れ難し

黠人は苦を覺り 愛欲に隨はざること

車輪を作り 能く致堅ならしむるが如し

念を増し欲に隨へば 已に有るも復た願ふ

已に放にして制せざること 渴して湯を飲むが

- (39) 宋・元・明の三本には「然」とある。同義。
- (40) 光・明及び「磧砂藏」には「證」とある。これを採ると「王に偈の義を證し」となる。
- (41) 宋・元・明の三本には「無厭」とある。同義。
- (42) この「以」は倒置の助辞。「世地」が「満」の補語であることを示している。
- (43) 「黠」の字は「悪慧」「悪賢さ」の意味で使う方が普通であるが、ここでは「善慧」を意味する。後に出る「黠人」は「慧者」の意。
- (44) 角・距 角と蹴爪。
- (45) この「聞」は「聞法」を意味するか。

稍稍欲を去れば 意やうやく稍く安んずるを得

道の定まるを得んと欲せば 悉く欲する所を捨て

よ

王言知意。悉治世地盡。四海内無不至屬。(175) 是亦

可爲厭。乃復遠欲貪海外國。大勝王即謂鬱多言。

童子若善 以尊依世

説欲甚痛 慧計乃爾

汝説八偈 偈上千錢

願上大徳 説義甚哀

願くは大徳(48)に上へん 義を説くこと甚だ哀(49)なり

鬱多以偈報言。

不用是寶 取可自給

最後説偈 意遠欲樂

家母大王 身羸老年

念欲報母

與金錢千 令得自供

大勝王。便上金錢一千。使得供養老母。

鬱多、偈を以て報こたへて言く、

是の寶を用て 取りて自給す可からず

最後に偈を説きて 意に欲樂を遠とほくればなり

家母は、大王(50) 身羸おろれ老年たり

念じて母に報んと欲す

金錢千を與へて 自供(51)するを得しめよ

大勝王、便ち金錢一千を上くへ、老母を供養するを得し

王言く、「意を知れり。悉く世を治めて、地盡き、四海の内に「我に」屬するに至らざる無し。是れ亦た厭あきたりと爲す可きに、乃ち復た遠く海外の國を貪らんと欲す」と。大勝王、即ち鬱多に謂て言く、

童子(47) 若善く 尊たつとを以てするも 世に依り

欲の甚だ痛なるを説けり 慧もて計せば乃ち爾り

汝 八偈を説けり 偈は千錢を上うはる

む。

佛語諸比丘。是時大勝者。即種稻梵志是也。時童子鬱多者。則我身是也。我是時亦解釋是梵志痛憂。我今亦一切斷是梵志痛憂已。終不復著苦。佛以是本因演是卷義。令我後學聞是説。欲作偈句爲後世作明。令我經法久住。

後學をして是の説を聞かしめ、偈句を作りて後世の爲に明と作し、我が經法をして久住せしめんと欲す」と。

佛、諸比丘に語りたまふ。「是の時の大勝なる者は、即ち稻を種<sup>う</sup>る梵志是れ也。時の童子鬱多なる者は、則ち我が身是れ也。我れ、是の時も亦た是の梵志の痛憂を解釋せり。我れ今も亦た一切是の梵志の痛憂を斷じ已り、終に復た苦に著かざらしめり」と。

佛、是の本因を以て是の卷の義を演べたまふ。「我が

義足經  
增念隨欲 已有復願  
日增爲喜 從得自在  
有貪世欲 坐貪癡人  
既亡欲願 毒箭著身  
是欲當遠 如附蛇頭  
違世所樂 當定行禪  
田種珍寶 牛馬養者  
坐女繫欲 癡行犯身  
倒羸爲強 坐服甚怨

- (46) 稍稍 少しずつ。次の「稍く」も同様。
- (47) この「童子」は呼びかけ。漢文訓読のみならず翻訳文でも多用される「よよ」という呼びかけは、日本語として不自然なので採らない。普通日本語では、目の前にいる人に対して「よよ」とは呼びかけない。
- (48) 大徳 童子に対する尊称。
- (49) 哀 心を強く動かすこと。
- (50) この「大王」も呼びかけ。
- (51) 自供 今は「自給」と同義。

次冥受痛<sup>(52)</sup> 船破海中

故説攝意 遠欲勿犯

精進求度 載船至岸

佛説是義足經竟。比丘歡喜。

とし

(六)故に意を攝むるを説く 欲を遠け犯すこと勿

れ

精進して度を求め 船に載りて岸に至れ、と

義足經<sup>(53)</sup>

(一)念を増し欲に隨へば 已に有るも復た願ふ

日に増すを喜びと爲せば 従つて自在を得

(二)世欲を貪り 貪癡に坐る人有り

既に欲願せるを亡へば 毒箭の身に著くがごと

し

(三)是の欲は當に遠くべし 蛇の頭に附するが如く

なれば

世の樂とする所に違ひて 當に定んで禪を行はず

べし

(四)田種・珍寶 牛馬・養者

女繫の欲に坐り 癡行 身を犯さば

(五)倒じて羸強と爲り 坐し服して甚だ怨む

次で冥に痛を受くること 船の海中に破るがごと

佛、是の義足經を説き竟りたまふに、比丘歡喜しき。

優填王經第二<sup>(54)</sup>

聞如是。佛在舍衛國祇樹給孤獨園。時有一比丘。在句參

國石間土室中。長髮鬚爪。被壞衣。時優填王。欲出遊

觀。(176 a) 到我迹山。侍者即勅治道橋。還白王。已治

道王可出。王但從美人妓女。乘騎到我迹山。下車歩上。

優填王經第二

聞きしことはくの如し。佛、舍衛國 祇樹給孤獨園に

在しき。

時に一比丘有り。句參國の石間の土室中に在り。髮鬚

爪を長くして、壞れ衣を被たり。

時に優填王、遊觀に出で、我迹山に到らんと欲す。(15)侍者即ち勅して道橋を治し、還りて王に白さく、「已に道を治せり。王、出づ可し」と。王、但だ美人妓女を從へ、騎に乗りて我迹山に到り、車を下りて歩き上る。

有一美人。經行山中。從崎至崎。顧見石間土室中。有一比丘。長鬚髮爪。衣服裂敗。狀類如鬼。便大聲呼。天子。是中有鬼。是中有鬼。王便遙問何所在。美人言。近在石間土室中。王即拔劍從之。見比丘如是即問。汝何等

人。對言。我是沙門。王問汝何等沙門。曰我是釋迦沙門。王言。是應眞耶。曰非也。寧有四禪耶。復言。無有也。寧三禪二禪耶。復言。無有。寧至一禪耶。對曰言。

實一禪行。王便恚內不解。顧謂侍者黃門。以姪意念。是沙門凡俗人無眞行。奈何見我美人。便勅侍者。急取斷絃截來繫是人。侍者便去。

(60) 一美人有りて、山中を經行し、崎より崎に至る。石間の土室中を顧見するに、一比丘有り。鬚髮爪を長くして衣服裂敗す。狀類、鬼の如し。「美人」便ち大聲に呼ぶ。

(52) 宋・元・明の三本には「病」とある。

(53) Cf. Sn.766-771.

(54) 宋・元・明の三本は「經」の字を欠く。

(55) 宋・元・明の三本は「石澗」とする。「澗」は谷間。以下同じ。

(56) 宋・元・明の三本には「鬚髮」とある。贊

(57) ここでは、宋・元・明の三本は「髮鬚」とする。

(58) 宋・元・明の三本は「釋家」とする。

(59) 『大正』の「急取斷絃截來繫是人」を、宋・元・明の三本は「急取斷絃蝨來噬是人」とする。『大正』の「斷絃截」は「断ち切ったロープ」程の意。三本の方は難解。「斷絃蝨」の「蝨」は蛾と同義で、蛾にも通じるので、<sup>59</sup>に引きつけて「蝨來噬是人」を「蟻がやってきてこの人を噬む」つまり、「蟻に噬ませる」という意に取るにしても、「取断絃」が浮いてしまい解釈が難しい。『大正』を採る。

(60) 一美人 同行した美人の中の一人。

〔天子。是の中に鬼有り。是の中に鬼有り〕と。王、便ち遙に問ふ。「何所に在る」と。美人言く。「近く石間の土室中に在り」と。王即ち劍を抜きて之に従ふ。比丘を見るに是くの如し。即ち問ふ。「汝、何等の人なりや」と。對<sup>こた</sup>へて言く。「我れは是れ沙門なり」と。王問はく、「汝、何等の沙門なる」と。曰く、「我れは是れ釋迦の沙門なり」と。王言く、「是れ應に眞なるべしや、非なりと曰ふべしや。寧ろ四禪有りや」と。「比丘」復た言く、「有ること無し」と。「王言く」「寧ろ三禪二禪ありや」と。復た言く、「有ること無し」と。「寧ろ一禪に至れりや」と。對へて曰て言く、「實に一の禪行のみなり」と。王、便ち悲<sup>いか</sup>りて内に解せざれば、顧て侍者黃門に謂く、「姪意の念を以てせん。是の沙門は凡俗の人にして眞行無ければ、奈何んが我が美人を見る」と。便ち侍者に勅すらく、「急ぎ斷絃截を取り來りて是の人を繫すべし」と。侍者、便ち去る。

山神念は比丘無過。今當怨死。我可擁護令脫是厄。便化作大猪身。徐走王邊。侍者即白王。大猪近在王邊。王便

捨比丘。拔劍逐猪。比丘見王去遠。便走出到舍衛祇樹給孤獨園中。爲諸比丘說本末。比丘即白佛。佛是時因是本變有義生。命我比丘悉知經卷。出語爲後世學作明。令我經道久住。

山神 念<sup>とが</sup>ずらく、「是の比丘に過無きに、今當に怨み死すべし。我れ擁護して是の厄より脱せしむ可し」と。便ち大猪身を化作し、徐に王の邊りに走る。侍者、即ち王に白さく、「大猪<sup>ぶた</sup>近きて王の邊りに在り」と。王、便ち比丘を捨て、劍を抜きて猪を逐ふ。比丘、王の去ること遠きなるを見て、便ち走り出でて舍衛の祇樹給孤獨園中に到り、諸比丘の爲に本末を説けり。比丘、即ち佛に白す。

佛、是の時、是の本變<sup>63</sup>に因んで義の生ずる有り。「我が比丘をして悉く經卷を知らしめん。語を出して、後世の學びの爲に明と作し、我が經と道とをして久しく住せしめん」と。

是時佛說義足經

繫舍多所願 住其邪所遮

以遮遠正道 欲念難可慧<sup>(64)</sup>

坐可繫胞胎 繫色堅雖解

不觀去來法 慧是亦斷本<sup>(65)</sup>

貪欲以癡盲 不知邪利增

坐欲被痛悲 從是當何依

(158) 人生當覺是 世邪難可依

捨正不著念 命短死甚近

展轉是世苦 生死欲溪流

死時乃念怨 從欲詆胎極

自可受痛身 流斷少水魚

以見斷身可 三世復何增

力欲於兩面 彼可覺莫著

莫行所自怨 見聞莫自汚

覺想觀度海 有我尊不計

力行拔未出 致使乃無疑

佛說是義足經。比丘歡喜。

是の時、佛、義足經<sup>(66)</sup>を説きたまふ。

(一) 舍に繫して願ふ所多く 其の邪の遮する所に住め

ば 以に遮して正道を遠けり 欲念は慧る可きこと難

ければなり ければなり 色に繫すこと堅くば 解す

(二) 繫す可き胞胎に坐り 色に繫すこと堅くば 解す

と雖も 去來の法を觀ぜず 慧らば是れも亦た本を斷ず

(三) 貪欲は癡盲なるを以て 邪なる利の増すを知らず

(61) 天子「嗚呼、神様」の類いの表現か、あるいは、中国語の表現として、王に大袈裟に呼びかけたものか。

(62) この「走」は、行く、赴く。

(63) この「変」は、思いがけない出来事、ほどの意。

(64) 宋・元・明の三本には「恵」とある。こちらを取ると「恵ふ可きこと難し」となる。こちらの方が自然か。

(65) 宋・元・明の三本は「恵」とする。ここは「恵」では訓みづらい。『大正』を採用。

(66) Cf. Sn. 772-779.

欲に坐り痛悲を被る 是れに従へば當に何の依かあるべき

(四)人生は當に是れを覺るべし 世邪は依る可きこと

難し、と

正を捨て念に著かずば 命は短かく死は甚だ近し

(五)展轉は是れ世の苦 生死は欲の溪流なり

死時に乃ち怨を念じ 欲に従ひ胎極を誣る

(六)自ら痛を受く可き身は 流れ斷え水少なきところ

の魚なり

以て身を斷ずるを可なりと見よ 三世に復た何を

か増さん

(七)力めて兩面を欲せば 彼れ著する莫きを覺る可し

自ら怨む所を行ずること莫かれ 見聞せるを自ら

汚すこと莫かれ

(八)想を覺りて海を度るを觀ぜよ 我有りと尊は計せ

ず

力めて行じて未だ出でざるを抜けば 致りて乃ち

疑無からしむ

佛、是の義足經を説きたまふに、比丘歡喜しき。

須陀利經第三<sup>(67)</sup>

聞如是。佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爲國王大臣及理家所

待敬。事遇不懈。飯食衣被。臥床疾藥。供所當得。是時

梵志自坐其講堂共議言。我曹本爲國王大臣人民理家所侍

遇。今棄不復用。悉反事沙門瞿曇及諸弟子。今我曹當共

作方便敗之耳。便共議。今但當求我曹部伍中最端正好女

共殺之。以其死屍。埋於祇樹間。爾乃毀傷沙門瞿曇及諸

弟子。令惡名遠聞。待遇者遠離不復敬之。學者悉不復得

衣食。皆當來事我曹。我曹便當爲世尊。壞瞿曇世無能勝

我曹者。

須陀利經第三

聞きしことは是くの如し。佛、舍衛國 祇樹給孤獨園に

在しき。國王・大臣及び理家<sup>(70)</sup>の待敬する所と爲る。事へ

遇するに懈<sup>おこた</sup>らず、飯食・衣被・臥床・疾藥、當に得べき

所を供したてまつる。

是の時、梵志自ら其の講堂に坐し、共に譏言すらく、「我曹、本、國王・大臣・人民・理家の待遇せし所と爲りしに、今、棄てて復と用ゐられず。悉く反きて沙門瞿曇と及び諸弟子に事へり。今、我曹、當に共に方便を作して之を敗るべきのみ」と。便ち共に議せり。「今は但だ、當に、我曹が部伍中の最も端正にして好しき女を求めて共に之を殺すべし。其の死屍を以て祇樹の間に埋めん。爾らば乃ち沙門瞿曇と及び諸弟子とを毀傷し、惡名をして遠く聞こえしめん。待遇せる者は遠離して復と之を敬せざらん。學者は悉く復と衣食を得ざらん。皆な當に來りて我曹に事ふべし。我曹、便ち當に世の尊と爲りて瞿曇を壞し、世に能く我曹に勝る者無かるべし」と。

即共行謂好首言。汝寧知我曹今棄不復見用。反以沙門瞿

曇爲師。汝寧能忿爲衆作利不。好首言。作利云何。曰唯捨壽命死耳。答言。我不能也。曰汝不能爾者從今以後。終不復內汝著數中也。(176c) 女聞大不樂。即言諾。是我職當也。衆學言。善哉。便共教女言。從今以後。朝暮到佛所。數往祇樹間。悉令萬姓見知汝。如是我曹共殺汝。埋著祇樹間。令瞿曇得毀辱不。小女即承教。數數往來沙門所。令衆人知女。如是便取女殺埋著祇樹間。

即ち共に行きて好首に謂ひて言く、「汝、寧ろ我曹の今や棄てて復と用ゐられず、反きて沙門瞿曇を以て師と爲せるをを知るや。汝、寧ろ能く忿りて衆の爲に利を作すや不や」と。好首言く、「利を作すとは云何ん」と。曰く「唯だ壽命を捨して死すのみ」と。答へて言く、「我れ能はず」と。曰く、「汝、爾する能はずんば、今よ

(67) 宋・元・明の三本には「經」の字を欠く。

(68) 「大正」の「臥」を、宋・元・明の三本は「臥具」とする。

(69) 諸本「待」に作る。「大正」の誤植。改める。

(70) 理家 漢語本来の意味としては「料理家」或いは「家を治めること」であるが、ここでは治める人、つまり官吏を指すか。

(71) 「以其死屍埋祇樹間」 倒置の構文。この「以」は、「埋」の目的語「其死屍」を先行させたもの。

(72) 宋・元・明の三本には「惟」とある。同義。

り以後、終に復と汝を著數中に内れざるなり」と。女聞きて大いに樂しまざれども、即ち言ふ。「諾。是れ我が職なれば當らん」と。衆學言く、「善きかな」と。便ち

共に女に教えて言く、「今より以後、朝暮に佛所に到り、數しば祇樹の間に往き、悉く萬姓をして汝を見知せしめよ。是くの如くせば、我曹、共に汝を殺し、祇樹の間に埋著せん。瞿曇をして毀辱を得しむや不や」と。

小女、即ち教を承けて數數沙門の所に往來し、衆人をして女を知らしむ。是くの如くして、便ち女を取りて殺し祇樹の間に埋著す。

衆梵志便相聚會。到王宮門。稱怨言。我曹學中有一女。獨端正花色無雙。今生亡不知處。王謂言。女行來常在何所。共對言。常往來沙門瞿曇所。王言。爾者當於彼求。便從王乞吏兵。王即與之。尋求行轉到祇樹間。便掘出死屍著床<sup>(74)</sup>上。共持於舍衛四道。悉遍里巷稱怨言。衆人觀沙門瞿曇釋家子。常稱言德戒弘普無上。如何私與女人通。殺埋藏之。如是當有何法何德何戒行乎。食時衆比丘。悉持應器。入城乞食。衆理家人民。遙見便罵言。是曹沙

門。自稱言有法德戒。子曹所犯若此。當有何善。奈何復得衣食。衆比丘聞如是。持空應器出城。洗手足盛藏應器。到佛所作禮悉住不坐。如事具說。

衆梵志、便ち相ひ聚會して王宮の門に到り、怨言を稱ふ。「我曹が學中に一女有り。獨り端正にして花色無雙なり。今、生と亡と、處を知らず」と。王謂ひて言く、「女の行來は常に何所に在りしや」と。共に對へて言く、「常に沙門瞿曇の所に往來せり」と。王言く、「爾らば當に彼に於て求むべし」と。便ち王より吏兵を乞ふ。王即ち之を與ふ。尋求して行き、轉た祇樹の間に到る。便ち死屍を掘り出して床上に著き、共に持ちて、舍衛の四道に於て、悉く里巷を遍くして怨言を稱ふ。「衆人、沙門瞿曇釋家の子を觀ずるに、常に德戒の弘普無上なるを稱言せるに、如何んぞ私に女人と通じ、殺して之を埋藏すや。是くの如くんば、當に何の法、何の德、何の戒行有るべけん」と。

食時に、衆比丘、悉く應器を持し、城に入りて乞食するに、衆の理家人民、遙かに見て便ち罵りて言く、「是曹

の沙門、自ら法・徳・戒有りと稱言せるに、子曹の犯す所、此くの若し。當に何の善有るべしや。奈何んぞ復た衣食を得んや」と。衆比丘の聞くことはくの如し。空の應器を持して城を出づ。手足を洗ひ、應器を盛藏して佛の所に到り、禮を作して悉く住するに、坐せずして事の如く具に説けり。

是時佛説偈言。

無想放意妄語 衆門被箭忍痛

聞凡放善惡言 比丘忍無亂意

佛告比丘。我被是妄謗。不過七日耳。

是の時、佛、偈を説きて言はく、

箭を被るも痛を忍ぶ

凡「夫」の善惡の言を放にするを聞くも 比丘は

忍びて意を亂すこと無かれ

佛、比丘に告げたまふ。「我が是の妄謗を被ること、七日を過ぎざるのみ」と。

是時有清信女。字惟閻。於城中聞比丘求食悉空還。甚鄙

念佛及比丘僧。便疾行到祇樹。至佛所頭面作禮。繞佛坐

一邊。佛爲廣說經法。惟閻聞經竟。起叉手白佛言。願尊

及比丘僧。從我家飯七日。佛默然受之。惟閻便繞佛三匝

而去。至七日。佛告阿難。(177a) 汝與衆比丘入城。悉

於里巷四徼街道説偈言。

是の時、清信女有り。字は惟閻。城中に於て、比丘の

意を放ほしにして妄語するを想ふこと無く

門衆たなかみく

(73) 著數 「親しい仲間」ほどの意か。

(74) 『磧砂藏』は「牀」。

(75) 宋・元・明の三本は「清淨女」。

(76) 宋・元・明の三本は「邨」とする。これは「恤」の異体字。こちらを採ると、「邨れみ」となる。

食を求むるも悉く空しく還るを聞きて、甚だ鄙<sup>は</sup>じて佛及び比丘僧を念じ、便ち疾く行きて祇樹に到る。佛の所に至り頭面もて禮を作し、佛を繞りて一邊に坐しき。

佛、爲に廣く經法を説きたまふ。惟閻、經を聞き竟り、起ち叉手して佛に白して言さく、「願はくは、尊及び比丘僧、我が家の飯を從<sup>ゆゑ</sup>したまふこと七日したまへ」と。佛、默然として之を受けたまふ。惟閻、便ち佛を繞ること三匝にして去る。七日に至りて、佛、阿難に告げたまふ。「汝、衆比丘と城に入りて、悉く里巷四徼街道に於て偈を説きて言げよ」と。

常欺<sup>(77)</sup>倒邪冥 説作身不犯  
重冥行欺具 自怨到彼苦  
修地利分具 不守怨自賊  
惡言截頭本 常關守其門<sup>(78)</sup>  
當尊反興毀 尊空無戒人  
從口内衆憂 嫉心衆不安<sup>(79)</sup>  
搏掩利人財 力欺亦可致  
是悉皆可忍 是最以亡寶

有怨於正人 世六餘有五  
惡有道致彼 坐意行不正  
欺咤有十萬

常に欺りて邪冥を倒じ 説きて身に犯さずと作す  
冥を重ねて欺を行ずること具<sup>つぎ</sup>にし 自ら怨めば彼の苦に到る  
地を修する利分け具ふるも 守らざば自らの賊なるを怨む

惡<sup>いづくん</sup>ぞ頭本を截りて 常に其の門を關守すと言はん  
當に尊<sup>そむ</sup>ぶべきに反<sup>そむ</sup>きて毀を興し 空しき無戒人を尊<sup>ぶ</sup>ぶ  
口<sup>よ</sup>從り衆憂を内れ 嫉心あれば不安衆し  
人を利する財を搏掩し 力<sup>つと</sup>めて欺くことも亦た致す可し  
是れ悉く皆忍ぶ可し 是れ最も以て寶を亡ぶ  
正しきを怨<sup>そし</sup>る人有り 世に六、餘に五有<sup>(80)</sup>  
惡<sup>かしこ</sup>ぞ道の彼<sup>かしこ</sup>に致る有りて 坐して意に不正を行ぜん

欺咤(81)に十萬有り

阿難即受教。俱入城。於里巷四街道。説如佛所言。即時  
舍衛人民及諸里家(82)。皆生意言。釋家子實無惡。學在釋

家。終不有邪行。是時衆異梵志。自於講堂有所訟。中有

一人。言露子曹事。於外出聲言。汝曹自共殺好首。而怨

佛及弟子乎。大臣聞是聲。便入啓王。王即召衆梵志問。

汝曹自共殺好首不。便言實爾。王怒曰。當重罰子曹。奈

何於我國界。自稱爲道。而有殺害之心。即勅傍臣。悉收

子曹。遍徇舍衛城里巷(83)。逐出國界去。

阿難即ち教を受け、俱に城に入りて、里巷四街道に於て説くこと佛の言のたまふ所の如し。即ち時に舍衛の人民と及び諸理家、皆意言を生ず、「釋家の子に實に惡無し。學

びて釋家に在るには、終に邪行有らず」と。

是の時、衆の異梵志 自ら講堂に於て訟ふる所有り。

中に一人有りて、「子曹の事を露さん」と言ひて、外に於て聲を出して言へり。「汝曹、自ら共に好首を殺せり。

而して佛と及び弟子とを怨むめるか」と。大臣、是の聲を聞き、便ち入りて王に啓ます。王即ち衆梵志を召して問は

く、「汝曹、自ら共に好首を殺せるか不まか」と。便ち言

く、「實に爾り」と。王怒りて曰く、「當に重く子曹を罰

く、

「實に爾り」と。王怒りて曰く、「當に重く子曹を罰

(77) 宋・元・明の三本は「到」とする。こちらを採ると「常に欺りて邪冥に到るも」となる。若干ニユアンスが変わるが、意味するところは同じ。

(78) 「大正」には「當尊反興毀」とあるが、宋・元・明の三本は「常尊及興毀」とする。こちらを採ると、「常に尊ぶも毀を興すに及び」となる。

(79) 「大正」は「搏掩」とするが、宋・元・明の三本は「搏掩」とする。「搏」は「博」の異体字。こちらを採ると「博く人を利する財を掩ひ」となる。

(80) 世に六、餘に五有り。この「世の六」はあるいは六師外道を指すかも知れないが確定できない。孰れにせよ「余の五」と共に、何を意味するのか未詳。

(81) 欺咤(81)に十萬有り。この「欺咤」も、原語は *stāgāta* (歌謠／聖歌) であろうが、未詳。

(82) 諸本「理家」に作る。『大正』の誤植。

(83) 宋・元・明の三本は「通」とする。「伝える」意。

すべし。奈何ぞ、我が國界に於て、自ら道を爲すと稱して殺害の心有る」と。即ち傍臣に勅すらく、「悉く子曹を收め、遍く舍衛城の里巷に徇げ匝りて、遂に國界より出で去らしめよ」と。

佛以食時。從諸比丘。皆持應器入城。時有清信士。名阿須利。遙見佛。便往作禮。揚聲白佛言。聞者不識四方名心甚悲。所聞經法。不能復誦。聞佛及比丘僧怨被惡名。佛謂阿須利言。不適有是宿命因緣。(177b) 佛便説偈言。

佛、食時を以て、諸比丘を從へたまふ。皆應器を持して城に入る。時に清信士有り。阿須利と名づく。遙に佛を見て、便ち往きて禮を作し、聲を揚げて佛に白して言さく、「聞くことは四方の名を識らず。心甚だ悲しめり。所聞の經法は復たと誦する能はず。佛と及び比丘僧との怨められ惡名を被るを聞けばなり」と。

佛、阿須利に謂ひて言く、「適<sup>のたまは</sup>ま是の宿命の因縁有るにあらず」と。佛、便ち偈を説きて言く、

亦毀於少言 多言亦得毀  
亦毀於忠言 世惡無不毀  
過去亦當來 現在亦無有  
誰盡壽見毀 難形尚敬難

亦た少言も毀られ 多言も亦た毀らるるを得  
亦た忠言も毀らるれば 世に惡を毀られざる無けん

過去も亦た當來も 現在も亦た「毀られざる」有る無きも  
誰か盡壽まで毀らる 形すら難きに尚ほ敬ふは難し

佛廣爲阿須利説經。便到須達家。直坐正座。須達便爲佛作禮。又手言。我屬者悲。身不識方面。所聞經法不能復誦。聞佛及比丘僧怨被惡名。

佛、廣く阿須利の爲に經を説きたまふ。便ち須達の家に到り、直ちに正座に坐したまふ。須達便ち佛の爲に禮

を作し、又手して言く、「我れ、<sup>(86)</sup>屬者、悲しめり。身みづから方面を識らず。聞きし所の經法、復と誦する能はず。佛と及び比丘僧との怨められ惡名を被るを聞けばなり」と。

が如く

我が忍意を念ずるも爾り 世人に喜念無し  
我が手に瘡瘍無ければ 手を以て毒を把りて行く  
瘡毒の従りて生ずる無し 善行に惡成ぜず

佛是時説偈言。

我如象行門 被瘡不著想

念我忍意爾 世人無喜念<sup>(87)</sup>

我手無瘡瘍 以手把毒行<sup>(88)</sup>

無瘡毒從生 善行惡不成

佛廣爲須達說經。便到維閻家。直坐正座。<sup>(89)</sup>維閻作禮竟。

又手言。屬者我悲。身不識方面。所聞經法。不能復誦。聞佛及比丘僧怨被惡名。

佛、是の時、偈を説きて言く、<sup>のたまは</sup>

我れ象の行きて門ひ 瘡を被るも想到著せざら

佛、廣く須達の爲に經を説きたまひ、便ち維閻の家に到り、直ちに正座に坐したまふ。維閻、禮を作し竟り、又手して言さく、「屬者、我れ悲しめり。身みづから方面を識らず。聞きし所の經法、復と誦する能はず。佛と及び比丘僧との怨められ惡名を被るを聞けばなり」と。

(84) 宋・元・明の三本には「惡言」とある。意味は通じるが、文脈上「忠言」の方が相応しいか。

(85) 『磧砂藏』には「尽形」とある。こちらを採ると「形を尽くすまで／尽形まで」となる。

(86) 屬者 近頃。最近。

(87) 宋・元・明の三本には「善念」とある。文脈の上では、こちらを採るべきか。

(88) 宋・元・明の三本は「瘡痒」とする。今は同義。

(89) 宋・元・明の三本は「惟閻」とする。この後総て同様。

佛因爲維閻說偈言。

無曉欲使惱 内淨外何汚

愚人怨自誤 向風揚細塵

佛、因りて維閻の爲に偈を説きて言はく、

曉ること無く惱ましめんと欲すとも 内淨なら

ば、外何ぞ汚れん

愚人怨みて自ら誤まること 風に向ひて細塵を揚

ぐるがごとし

維閻是時。快飯食佛比丘僧竟。澡水與<sup>(90)</sup>下坐。聽佛說經。

佛爲説守戒淨行。悉見諸道便而去。時國王波私匿<sup>(91)</sup>。具從

事騎<sup>(92)</sup>。以王威法。出城到祇樹。欲前見佛故。乘騎未到。

下車步入。遙見佛。便却蓋解冠。却諸侍從。脱足金屣。

便前爲佛作禮就座<sup>(93)</sup>。又手白佛言。屬者甚悲。身不識方

面。所聞經法不復誦。聞佛及比丘僧怨被惡名。

維閻、是の時、快<sup>ほし</sup>に佛と比丘僧とに飯食し竟り、澡

水して與<sup>とも</sup>に座より下りて、佛の經を説きたまふを聽けり。佛、爲に守戒の淨行を説きたまひ、悉く諸道を見し<sup>あらは</sup>て便<sup>すま</sup>而ち去りたまふ。

時に國王波私匿、具さに車騎を從へ、王の威法を以て城を出て祇樹に到る。前<sup>す</sup>みて佛に見えんと欲するが故に、乘騎の未だ到らざるに、車を下りて歩みて入り、遙かに佛を見て、便ち蓋を却け冠を解き、諸の侍從を却け、足の金屣を脱ぎて便ち前み、佛の爲に禮を作して座に就く。又手して佛に白して言さく、「屬者<sup>むろ</sup>、甚だ悲しめり。身<sup>みづか</sup>ら方面を識らず。聞きし所の經法、復と誦へず。佛と及び比丘僧と怨められ惡名を被るを聞けばなら」と。

佛即爲王說偈言。

邪念說彼短 解意諦說善

口直次及尊 善惡捨不憂

(177c) 以行當那捨 棄世欲自在

抱至德不亂 制欲人所詰

佛、即ち王の爲に偈を説きて<sup>(94)</sup>て言く、

(一) 邪念もて彼の短を説き<sup>あまろか</sup> 諦なりと解意して善なりと説く  
口より直に次で尊に及ぶとも 「尊は」善惡を捨てて憂へず

(二) 行を以て當に那<sup>な</sup>をか捨つべき 世を棄てて自在を欲す

至徳を抱きて亂れず 欲を制するも人の詰る所  
ならん

舍衛一國人民。悉生念疑。佛及比丘僧。從何因縁。致是惡名聲厄。共視佛威神。甚大巍巍。如星中月。適無敢難。

舍衛一國の人民、悉く念を生じて疑ふらく、「佛と及び比丘僧と、何の因縁に従りて是の悪しき名聲の厄を致す。共に佛の威神を視るに、甚だ大にして巍巍たること、星中の月の如し。適<sup>ま</sup>に敢て難<sup>ま</sup>ずる無けん」と。

佛悉知其所念。便說是義足經言。

如有守戒行人 問不及先具演  
有疑正非法道 欲來學且自淨  
以止不拘是世 常自說著戒堅  
是道法點所信 不著綺行教世  
法不匿不朽言 毀尊我不喜恐  
自見行無邪漏 不著想何瞋喜  
所我有以轉捨 鷲<sup>(95)</sup>明法<sup>(96)</sup>正著持

(90) 宋・元・明の三本には「座」とある。こちらを採る。

(91) 明版は「波斯匿」とする。以下同様。

(92) 麗藏・磧砂藏には「車騎」とある。『大正』の誤植。改める。

(93) 『大正』には「座」とあるが、宋・元・明の三本は「坐」とする。『大正』を採る。

(94) Cf. Sn. 780-781.

(95) 宋・元・明の三本は「鮮」とする。「鷲」は、今は「鮮」と同義。

(96) 宋・元・明の三本は「止」とする。「止」を採ると「止に」と訓む。

求正利得必空 以想空<sup>(97)</sup>法本空

不著餘無所有 行不願三界生

可<sup>(98)</sup>瞑冥悉已斷 云何行有處所

所當有悉裂去 所道說無愛著

已不著亦可離 從行拔悉捨去

佛說是義足經竟。比丘歡喜。

佛、悉く其の所念<sup>しごめ</sup>を知し、便ち是の義足<sup>(99)</sup>經を説きて言<sup>のたま</sup>く、

(三)如<sup>も</sup>し戒行を守る人有りて 問の及ばざるに先ん

じて具に演べなば

正と非法との道を疑ふ有らん 來りて學び且つ

自ら淨めんと欲すべし

(四)止を以て是の世に拘らず 常に自ら説きて戒の

堅なるに著く

是の道法は黠の信ずる所なり 綺行に著せず世

に教<sup>う</sup>

(五)法は匿<sup>かく</sup>れず朽言ならず 尊を毀つも我れ喜恐せ

ず

自ら行を見なば邪漏無し 想に著せずんば何ぞ

願喜せん

(六)我が有<sup>た</sup>つ所は以て轉<sup>う</sup>た捨て 龜明なる法のみ正

に著持す

正利を求めなば得るは必ず空なり 空を想ふを

以て法は本より空なり

(七)餘に著せず所有無し 行じて三界の生を願はず

瞑冥は悉く已に斷ず可し 云何んが行ずるに處

所有らん

(八)當に有<sup>た</sup>つべき所は悉く裂き去り 道説<sup>と</sup>く所に愛

著無し

已に著せざるも亦た離る可し 行ずるに従ひて

抜き 悉く捨て去らん

佛、是の義足經を説き竟りたまふに、比丘歡喜しき。

- (97) 宋・元・明の三本は「相」とする。同義。
- (98) 『大正』には「曠」とあるが、宋・元・明の三本は「曠」とする。孰れでも意味は通じる。
- (99) Cf. Sh.782-787.